アジアにつながる文化の輪！

染織史家・吉岡幸男さんマレーシア滞在記。染織史家とバティック職人たちの交流！

2015.04.15

1 ツイート 0
いいね！ G+1

2014年12月13日から2015年1月11日の期間で、マレーシアはクアラルンプールの『マレーシア自然史博物館』にて、染織史家・吉岡幸雄さんによる、初の個展が開催されました。

吉岡さんは、江戸時代から続く京都の染屋「染司よしおか」五代目当主を継ぎ、染師・福田伝士氏と二人三脚で植物染によって、日本の伝統色の再現に取り組んでいます。奈良東大寺の伎楽装束四十領をはじめ、昔ながらではの色彩を植物染料による染色によって再現、継承されています。

個展初日には吉岡さんの制作を題材にしたドキュメンタリー映画『紫』上映されたほか、講演会や染めの実演ワークショップも開催されました。

個展初日から、吉岡さんのもとには多くの参加者とメディアが詰めかけ、大反響でした

自然をコントロールせず、自然と共に生きていく
講演会では、染色の作業で必要不可欠な京都の水のこと、「紫」という色が実現するのに最も難しい色であるということ、また、染色の歴史などについてお話されました。

特にお話で印象的だったのは
「現代では化学染色が主流で、自然の染色を教育する機関がありません。ですから私は染色技術を隠さず、オープンにしているのです。技術を隠してしまうと滅びてしまいます。伝統的な技法を守るのは、私たちの仕事でもあります。自然の染色技法は、自然をコントロールしようとするのではなく、一緒に生きていくことなのです」

というお話でした。

会場からは「どうしたら先生の技術を学ぶことができますか？」という意欲的な質問や、染めの技術的な質問まで寄せられました。

実は吉岡さん、今回の個展に合わせてマレーシア東海岸にある、クランタン州やトレガヌ州へ足を伸ばし、マレーシアの染色の歴史と現状を探る調査もされました。

クランタン大学での特別講義

染めに携わる者同士、伝統への想いを語らう

まず吉岡さんが訪れたのは、1911年にクランタン州で初めて開かれたというバティック工場や、バティックの工房です（バティックとは、マレーシアの伝統的な染色の布。さまざまな型押しの模様が特徴的）。工房では4代目のオーナーと型押しバティックのブロックを手作りしている職人さんとの交流がありました。

吉岡さんが「（量産が増えて）楽に作ろうと思えばいくらでもできる時代に、どうしてわざわざ手染めのバティックを続けられているんですか？」と尋ねると、オーナーは「私がやらないで、誰がやりますか？」と答えたそうです。この答えに、吉岡さんは「まさに僕がいつも言っていることだ」と、感銘を受けました。

マレーシアでは現在、手作りのバティック作りを続けている職人は片手で数えられるくらいしか残っていません。バティックを手染めする技術は、量産におされ、かつ後継者不足の危機的な状況にあります。

この状況をなんとかしたいと思っていたバティック研究者たちと、吉岡さんとの交流がクアラルンプールで行われました。中には「ぜひ吉岡先生に弟子入りしたい！」という方もいたそうです。

吉岡さんのお話によると、自然の染色が主流だった昔の日本では、東南アジアから渡って来た染色の原料があったそうです。今回の現地調査では、「伝統継承」を守り続ける職人や、若い研究者との交流がありました。この交流によって、マレーシアの 伝統技術を未来へ引き継ぐヒントと刺激が生まれたのは確かです。

今回の交流を通して、日本でもマレーシアでも、伝統を継承し続けていくことは簡単なことではなく、だからこそ継続した交流と助け合いが必要であることを強く感じました。

企画名	REVIVE THE LEGEND – REVITALISING JAPAN'S TRADITIONAL COLOURS FROM THE NATURE OF ASIA
日時	2014年12月13日（土）～2015年1月11日（日）
会場	Natural History Museum、クランタン大学他
主催	国際交流基金クアラルンプール日本文化センター
共催	マレーシア自然史博物館
URL	http://www.ifkl.org.my/events/revive-the-legend/

中村綾花：フランス・パリを拠点に活動するフリーライター。著書は、世界で婚活の旅をしながら恋愛・結婚事情をレポートした「世界婚活」（朝日出版）。有料コンテンツ・サイト「cakes」にてパリの本当の日常をレポートする「すっぽんぽんパリ」連載中。https://cakes.mu/series/3055

1 ツイート 0
いいね！ G+1

アジアにつながる文化の輪！